

「モジホコリの実験 (13)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

モジホコリの子実体は、肉眼で辛うじて見える程度の大きさで、他の変形菌の子実体と比較しても、決して美しいとは言えない。しかし、自然の創りだすものの形状や色彩は、人間に美しさを提供する為にあるわけではない。モジホコリの子実体も、胞子をつくって拡散させるための器官に過ぎない。



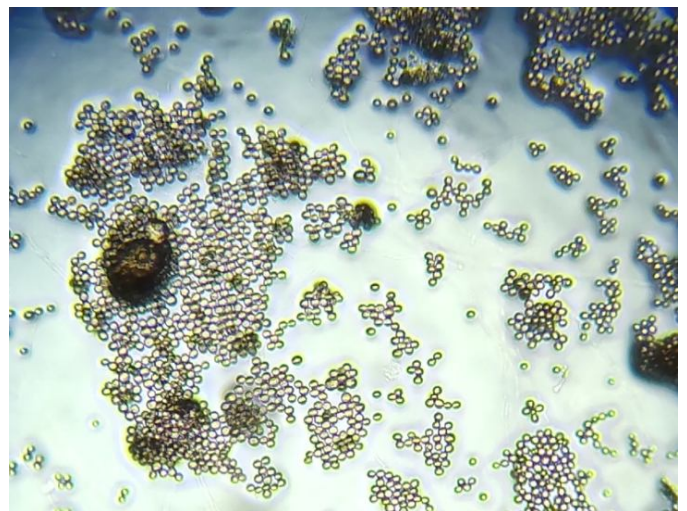
これは成熟したモジホコリの子実体を、真横から見た顕微鏡写真である。このような角度で顕微鏡画像を得るのは、実は非常に難しい。子実体のついたろ紙を直角に折って、それをスライドに貼って観察した。



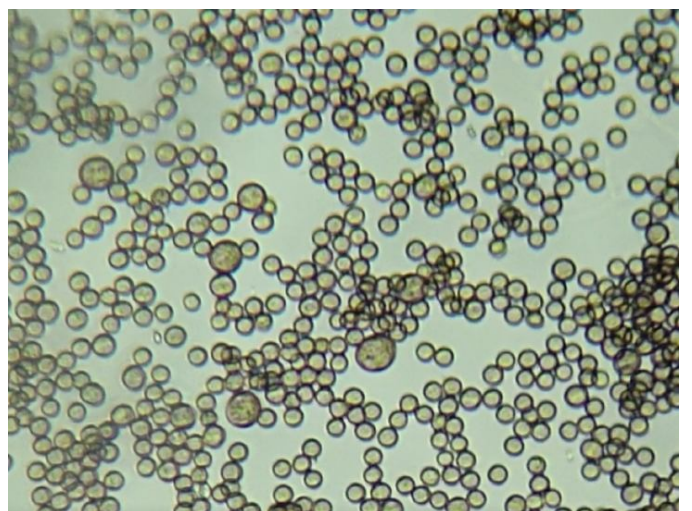
上の写真からわずか20分後、子実体(胞子嚢)は黒から黄色になり「粉まみれ」という感じに変化した。胞子嚢が破れて、胞子の拡散を始めたのだろう。外皮全体が粉化したという印象である。



中には上部に穴が開いて、その穴から胞子を飛ばしている子実体もあった。いろいろな方法で胞子の拡散を試みているようだ。



最後に子実体がつくった胞子を顕微鏡で観察してみた。一般的なキノコ(真菌類)の胞子と見た目も大きさも大差はない。凄まじい数である。



時々大きな胞子が混ざっているのが面白い。寒天培地上で水分を与え続け、発芽する様子を見たかったのだが、12時間たっても一つも発芽しなかった。